

日本語の論説的文章における指示詞「この」「その」

—日本語母語話者と日本語学習者の使用の比較—

浅井 美恵子

キーワード 論説的文章、結束性、日本語母語話者と日本語学習者の比較、
指示詞「この」「その」

1 はじめに

論説的文章を書く際には、文と文、節と節をまとめる結束性が必要となるが、結束性に関わる言語形式は、接続表現、指示表現、反復表現、省略表現、提題表現、叙述表現と多岐にわたる。上級日本語学習者には論文やレポートなどの論説的文章を書くことが求められるが、このような様々な言語形式を駆使して適切な結束性を持つ文章を書くことは、日本語母語話者といえども難しく、日本語学習者にとってはさらに大きな問題となる。

日本語の文章の結束性の中で、指示表現は「前の段落を総括して、あとの文の中に持ち込んで、内容上のつながりを示そうとする。」(市川1978:58)、「より具体的な意味内容のレベルで前後をつなぐ」(高崎1988:71)ものとされ、文脈の展開に重要な役割を担っていると考えられる。

本稿では、結束性に関わる指示表現の中から指示詞「この」「その」を取り上げ、¹⁾日本語母語話者の作文と日本語学習者の作文に現れる「この」「その」の使用に関する特徴を分析する。

2 先行研究

文章の結束性に関わる指示詞「この」「その」は、用法によっていくつかに分類されている。

庵(1994)では指示詞「この」「その」を「こ／そ」の部分だけが先行詞と照応している代行指示と、「この／その＋名詞句」全体で先行詞と照応している指定指示の2用法に分類している。

- (1)昨日バラを買ったが、そのにおいは非常に強かった。〈代行指示〉
 (2)昨日バラを買ったが、この花は母との思い出の花だ。〈指定指示〉

そして、庵（1994）（1995a）（1995b）では、代行指示と指定指示に関して以下の5つが指摘されている。

- ①代行指示は「誰の」「何の」などの必須的な補語を取る「著者」「音」などの1項名詞に限られる。
 ②代行指示で、単一文句中で照応を閉じる場合「その」しか使えない。

(3)蝶はその（*この）飛び方が非常に独特である。

③代行指示で、非単一文で照応している場合は「この」「その」とも使えるが、先行詞が人の場合「この」の許容度は低い。

(4)太郎は人気者だ。しかし、その（*この）弟は乱暴者で嫌われている。

④指定指示で、先行詞が固有名詞ないし総称名詞で言いかえがある場合は「この」しか使えない。

(5)私はコーヒーが好きだ。この（*その）飲み物はいつも疲れを癒してくれる。

⑤指定指示で、名詞句が語彙的意味以外にテキストごとに臨時に持つ意味の付与をマークするときは「その」が使われ、テキストのトピックと関与性が高い名詞句をマークするときは「この」が使われる。²⁾

(6)今日ぜんざいを食べた。このぜんざい（＝[テキストのトピック]）は甘くておいしかった。

(7)今日ぜんざいを食べた。そのぜんざい（＝今日食べたぜんざい）は甘くておいしかった。

竹田（2001）では、日本語の文章13編内の「この」「その」を代行指示、指定指示、限定指示の3つに分類し、用例数について χ^2 検定を行っている。

竹田の分類では、代行指示は庵（1994）の分類と同じであるが、指定指示を2つに分けている。「この／その＋名詞句」が先行詞を指し、言い換えがある場

合を指定指示、「この／その＋名詞句」が先行詞を指し、先行文脈の名詞句と当該名詞句が同じ場合を限定指示としている。

- (2)昨日バラを買ったが、この花は母との思い出の花だ。〈指定指示〉
 (8)昨日バラを買ったが、そのバラはすぐしおれてしまった。〈限定指示〉

竹田（2001）の検定の結果、代行指示では「その」が、指定指示では「この」が有意に多く見られた。限定指示では「この」「その」の使用数に差は見られなかった。

庵（1994）の分類と竹田（2001）の分類を整理すると、下図の通りである。

庵（1994）	(a) 代行指示	(b) 指定指示	
竹田（2001）	(a) 代行指示	(c) 指定指示	(d) 限定指示

図1 庵（1994）と竹田（2001）の「この」「その」の分類

以上のように、いくつかの先行研究で日本語の「この」「その」について分類がされており、竹田（2001）では日本語の文章全般の用例数を調査しているが、日本語の論説的文章での「この」「その」の使用についての研究はされていない。また、日本語学習者の指示詞に関する研究は迫田（1998）などがあるが、日本語学習者の文章における指示詞の研究で「この」「その」を扱っているものはまだない。

したがって、本稿では、以下の2点を分析、考察する。

- 1) 日本語の論説的文章において、どのような「この」「その」の使用が見られるか。
- 2) 日本語学習者は「この」「その」に関して日本語母語話者と違った使用傾向が見られるか。

3 分析の枠組み

本稿の観点を明らかにするために、日本語母語話者（以下母語話者とする）30名と日本語学習者（以下学習者とする）32名に書いてもらった作文を分析した。母語話者は既に論文を書いた経験がある大学院生、学習者は中国語母語話者で、日本語能力試験1級に合格しており、自国あるいは日本で2年半以上の

日本語学習経験がある人である。³⁾ 作文の書き手は日本語でレポート・論文を書く必要があり、母語話者については既に論文を書いた経験があること、学習者についてはレポート・論文を書く能力があることから選んだ。

作文は「ゴミ問題の現状と解決法」というテーマで、800字程度のものである。テーマは、新聞等で社会問題として取り上げられており、ほぼすべての人が何らかの既有知識を持っていると思われるため、上記のものを選んだ。内容と目的の制約として、「ゴミ処理のコスト」「埋め立て地」というキーワードを設定し、授業のレポートとして書くことを指示した。時間的な制約はしなかったが、母語話者、学習者とも全ての書き手が2時間以内で800字程度⁴⁾の作文を完成することができた。

この作文資料から指示詞を含む文を取りだし、そこで使用されている文脈指示の指示詞「この」「その」「これらの」「それらの」⁵⁾の数と用法について分析、比較した。

用法は庵(1994)、竹田(2001)に従って分類した。(以下、分類の名称は図1に記されているものを用いる)。

4 結果と考察

4-1 日本語母語話者の「この」「その」の使用

まず観点1)を検証するため、母語話者の「この」「その」について見ていく。「この」は(a)代行指示5例、(b)指定指示31例(計36例)、「その」は(a)代行指示45例、(b)指定指示19例(計64例)見られた。

(a)代行指示に関して、「この」「その」は全て1項名詞についており、単一文中で「この」を使用している例はなかった。これは庵の指摘①②と一致している。

- (9)これらの一般ゴミの処理や自治体による監督は税金でまかなわれているが、その額は一般には知られていない。(母語話者:下線は筆者。以下も同様)

また、庵の指摘③については、非単一文中では先行詞が人である例が見られず、検証はできなかった。先行詞が人である例がなかったのはテーマによるものと考えられ、他のテーマの文章で改めて検証する必要があるだろう。

- (b)指定指示に関する指摘④についても、言い換えがある場合には「この」の

みが用いられていた（例⑩）。

⑩例えば生ゴミ処理機。この機械で家庭の生ゴミを肥料にすることができる。（母語話者）

指摘⑤については、書き手の意図によって「この」「その」いずれも使うことができるため、今回の作文の分析で検証することは難しい。フォローアップインタビューなどを行う必要がある。しかし、例⑪のように、「この+数量詞」「これらの」という形で、前に述べられている複数の項目をまとめて述べられるのに、(b)指定指示「この」が用いられていた。同列に複数列記されている項目がまとめて再提示される場合には、文章のトピックとの関与性が高いと思われる。この場合に「この」が用いられていることは庵の⑤の指摘を裏付けているものであると考えられる。

⑪生活者にとってのゴミ処理を大別すると、ゴミ処理を行政に託す、ゴミ処理を個人で行なう、の2つに分けられる。個人の状況によりその割合は、異なる。私はこの2種のゴミ処理に対し、それぞれに対応できる解決法を以下に示す。（母語話者）

「この」「その」の用例ごとの使用数を見ると、(a)代行指示は「その」が多く用いられていた。(b)指定指示では「この」が多く用いられていたが、「その」も用いられており、顕著な差があるとは言えなかった（表1）。

さらに詳細に見るために竹田（2001）の分類をすると、

「この」は(a)代行指示5例、(c)指定指示15例、(d)限定指示16例であり、「その」は(a)代行指示45例、(c)指定指示9例、(d)限定指示10例であった。これは(c)指定指示「この」が有意に多いとする竹田（2001）の結果と異なっている。その原因として、i) 竹田（2001）に比べ、今回分析した「この」「その」の数が少ないこと、ii) 竹田（2001）の(c)指定指示「この」の用例が論説的文章では現れにくいこと、が挙げられる。

表1 「この」「その」の使用数（1）

日本語母語話者				
こ の	(a) 代行	5		
	(b) 指定	31	(c) 指定	15
(d) 限定			16	
そ の	(a) 代行	45		
	(b) 指定	19	(c) 指定	9
(d) 限定			10	

竹田 (2001) の(c)指定指示は、例(12)のように、比喩や言い換えがある場合を含んでいる。比喩や言い換えは修辭的な表現であり、論說的文章に求められる文章の明確さや客観性を妨げる可能性がある。そのため、論說的文章では(c)指定指示を用いるような表現が使用されず、「この」の使用数が少なくなっていると考えられる。

(12) 蛍から生活の今昔を見る。この小さな光が、いかに人間生活と多様なかわりをもってきたことか。(竹田 (2001) より)

母語話者の論說的文章内の「この」「その」は、庵 (1994) の指摘をほぼ裏付けた使用がされていたといえる。しかし、竹田 (2001) の調査とは異なり、(c)指定指示「この」は多くなかった。これには論說的文章の特徴が影響していると考えられるが、さらに多くの文章を分析していく必要があると思われる。

4-2 日本語母語話者と日本語学習者の「この」「その」の比較

次に、観点2)を明らかにするため、母語話者と学習者の「この」「その」の使用数と用例ごとの数を庵 (1994) に従い分類し、比較した。⁶⁾その結果、母語話者は「この」36例、「その」64例、学習者は「この」18例、「その」33例で、いずれも母語話者が学習者より多く使用していた(表2)。母語話者と同様、学習者でも「この」は(b)指定指示で多く用いられていた。「その」は(a)代行指示で多かったが、(b)指定指示でも用いられていた。

表2 「この」「その」の使用数(2)

		母語話者	学習者
この	(a) 代行	5	5
	(b) 指定	31	13
その	(a) 代行	45	22
	(b) 指定	19	11

表3 代行指示の使用数

(a) 代行		母語話者	学習者
この	非単一文	5	7
その	非単一文	23	21
	単一文	22	3

(a)代行指示で「この」を単一文中的照応で用いる例は、学習者でも見られなかった。一方、母語話者の「その」の非単一文中的使用数が23例、単一文中的使用数が22例でほぼ同数であったが、学習者は非単一文中的使用数が21例に対し、単一文中的使用数は3例で少なかった(表3)。

例(13)のように母語話者が(a)代行指示の「その」を用いて1文にまとめることができる場合にも、学習者は例(14)(15)のように、語句を反復したり、複数の文に分けていたりしていると思われる。そのため、「その」の単一文中的照応が少なくなっていると考えられる。

- (13)しかし、ゴミによる環境問題そしてその影響は集団にかえってくる。(母語話者)
- (14)だから、ゴミの分類はゴミの処理の上には非常に重要な作業である。(学習者)
- (15)ゴミ処理のコストはゴミ量の増加にしたがって、年々増えてくる。それだけではなく、ゴミ処理の埋め立て地も増加せざるをえない。(学習者)

また、学習者では例(16)(17)のように、(a)代行指示の当該名詞句に「中」「後」「時」などの名詞を用いている場合が多い。「この／その中」「その後」「その時」などは、初級段階で学習され成句的に用いられるため、学習者にもよく使われる。しかし、(a)代行指示には「1項名詞に限られる」という制約があるため、上級学習者でも(a)代行指示の使用は成句的なものに偏り、他の名詞における「この」「その」の使用を回避していると思われる(例(18))。

- (16)現在、世界中で環境問題が注目されてきた。その中でゴミ問題は深刻化している。(学習者)
- (17)しかし、どのように努力しても、最後はやはり沢山のゴミは利用できないから埋めなければならない。その時、埋め立て地は大きな問題になる。(学習者)
- (18)政府側は、たくさんのお金を出して、ゴミ処理の場所をさがしているが、なかなか見つかない。最大の原因は誰でもゴミ処理場の隣にすみたくないと思う。(学習者)

(b)指定指示に関しては、母語話者、学習者ともに「この」「その」の使用数に顕著な差は見られなかった。(b)指定指示の「その」の使用割合は、母語話者は50例中19例(38%)、学習者は24例中11例(45.8%)で、学習者の方が母語話者より高かった。母語話者では例(19)のように「この+先行詞と同一名詞句」を使ってトピックを明確にする例が多く見られるが、学習者では母語話者ほど使われていない。先行詞と同一名詞句を使う場合に語句の反復のみで同定できるため、学習者では、例(20)のように「この」を使用しない可能性があると思われる。

る。

- (19)つまり、問題の核は、このマクロとミクロのギャップにあるのである。では、このギャップはなぜ生じるのだろうか。(母語話者)
- (20)特に発展途上国の環境問題は厳しい挑戦に面している。環境問題の中で、ゴミ処理の問題は特に深刻である。(学習者)

以上のように、学習者は「この」「その」の使用を回避している場合があり、母語話者に比べて使用数が少なくなる一因となっていると考えられる。(a)代行指示「その」の単一文中での使用は、語句の反復を減らすことができ、冗長さの軽減につながると思われる。また、(b)指定指示「この」は、庵の指摘⑤で示されているように、トピックと関与しており、文章の結束性と深く関わっていると考えられる。そのため、これらの「この」「その」の使用の少なさは、学習者の文章の不自然さや結束性の希薄さにつながる可能性があると思われる。

5 結論

以上、日本語の母語話者の文章の分析では、ほぼ先行研究の指摘どおりの使用がなされていた。しかし、指定指示の「この」の使用数では竹田(2001)の結果ほど顕著な差は見られなかった。今回の分析で、論説的文章というジャンルでの「この」「その」の使用に傾向があることが示唆されたといえる。

母語話者と学習者の「この」「その」の使用を比較すると、いずれも学習者は母語話者ほど使用せず、学習者の文章では「この」「その」の使用が回避されている可能性があることがわかった。論説的な文章を書く際に、学習者が適切で様々な用法の「この」「その」を使えるように指導を進める必要があると思われる。

「この」「その」をはじめとする指示表現を適切に使用することで、不自然な語句反復を防ぎ、トピックでまとまった結束性のある文章を作成することができる。今後、さらに他の指示表現についても研究を進め、より自然で結束性がある論説的文章を書くために何が必要か明らかにしていきたい。

<注>

- 1) 「あの」は分析対象の日本語母語話者、日本語学習者の作文でも使用されておらず、本稿では扱わない。
- 2) 庵 (1995b) では、指定指示の場合、上の2つの指摘のほか、先行詞と当該名詞句との距離も「この」「その」の使い分けに関わると述べている。
- 3) 日本語学習者32名のうち、日本のみで日本語を学習した者は2名である。自国で日本語を学習した者と、文章の長さ、文構造などで差は見られなかった。そのため、今回は自国で日本語を学習した者と日本のみで学習した者を区別せず、両者の作文を分析対象とした。
- 4) 母語話者の作文の平均文字数は782.6字、学習者の作文の平均文字数は761.0字であった。
- 5) 「この」「その」のうち、「このような」「そのような」となっているもの、「そのため」「そのうえ」といった接続詞に含まれているものは除外した。
- 6) 母語話者と同様に、学習者についても竹田 (2001) の分類をした。その結果、「この」は(c)指定指示が8例、(d)限定指示が5例、「その」は(c)指定指示が4例、(d)限定指示が7例あった。しかし、竹田の分類ではそれぞれの用例数が非常に少なくなるため、今回は庵 (1994) の分類によって比較していくこととする。

<参考文献>

- 浅井美恵子 (1999) 『上級日本語学習者の作文における複文・重文構造について』名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻修士論文
- 庵功雄 (1994) 「結束性の観点から見た文脈指示—文脈指示に対する一つの接合法—」『大阪大学日本学報』13: 31-39
- (1995a) 「語彙の意味に基づく結束性について—名詞の項構造との関連から—」『現代日本語研究』2: 85-102, 大阪大学文学部日本語学科
- (1995b) 「テキストの意味の付与について—文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に—」『大阪大学日本学報』14: 79-92
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究 日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習

得』溪水社

高崎みどり (1988) 「文章展開における“指示語句”の機能」『言語と文芸』103

号：67-88, 東京教育大学国語国文学会

竹田完次 (2001) 「ソノとコノの指示文脈」『計量国語学』23巻2号：91-109